

世界に誇る東北の偉人展

展示期間 平成二十四年一月六日(金)～十一月三十日(金)

蘇峰の書

軸物4点

◆ 乾坤正気

◆ 四時皆春 為塩崎仁兄家門繁栄 老蘇七十八

◆ 吉田初三郎画 「福祿寿」

蘇峰画賛 「景雲揺曳 仙客歩盧 蟠桃在手 福寿兼臻 頑蘇八十八」

◆ 蘇峰達磨画 「一心安靜 万病浪治 不倒翁 静峯賢契一栄 頑蘇八十九」

青森県

吉田初三郎・珍田捨己・棟方志功

吉田初三郎

(1884～1956 明治17～昭和31) 京都府

大正・昭和期の鳥瞰図師。若くして友禅図案師などに奉公。日露戦争従軍後、師である洋画家・鹿子木孟郎の助言で鳥瞰図作成に方向転換した。大正から昭和初期に起こった観光ブームで初三郎の人気は高まり、『大正の広重』と呼ばれ、描いた鳥瞰図は1600点以上に達する。青森県八戸の種差海岸にアトリ工兼別邸「潮観荘」を建設し、活動の拠点とした。本年度展示中の「阿蘇周辺図巻」は、同じく展示中の「佐敷附近景勝略図(水俣小景)」を描いた翌年、蘇峰の依頼を受けて描いた鳥瞰図。絵の右上には初三郎の筆でこの鳥瞰図を描くに至った経緯が左記のように書かれている。

◆ 展示中の「阿蘇周辺図」の中の一文◇

本圖八紀元二千六百年皇国未曾有ノ国難大東亜戦争第五年ノ早春 即チ昭和二十年其二月二十二日 東海熱海晚晴草堂ニ存セル徳富蘇峰先生ヨリ 当時純

忠菊池一門ノ史跡図謹筆ノタメ 熊本県芦北郡佐敷町ニ止宿中 筆者宛御高

信ヲ以テ先生六十年ノ御旧作ノ分 明蘇嶽在雲間 極目原頭倦鳥還 欲向相知問消息 秋風吹夢落家山 ノ御詩ニ添ヘテ熊本市東郊ヨリ見タル阿蘇外輪山其他周辺ノ光景ヲ初三郎一流ノ鳥瞰描写ヲ以テ執筆セヨ 坐シテ家山ノ風光ニ接シタシトノ有難キ御懇囑ヲ拜シ襟ヲ正シテ謹諾 其尊キ知己ノ御鴻恩ニ感泣シ学聖のみこと可しこみ死も生も絵筆に捧げ可へりみはせじ 学聖の尊き御旨つらぬ可む 輿一の弓を恵みませ神ノ一首ヲ捧ゲテ 筆者ノ恩師曾て明治神宮ハ奉天入城図ヲ謹筆献画セラレタル故鹿子木孟郎先生ノ靈前ニ報告而シテ其記念スベキ陸軍記念日三月十日佐敷ヲ出發阿蘇神社ニ参拝本図ノ大成ヲ祈願宮司到津男爵ヨリ特ニ社實阿蘇神社ノ古図ヲ拝観参考トシテ是ヲ謹寓 (中略) 斯クテ同年四月以降戦局ハ更ニ緊迫殊ニ冲縄破シテ以来ハ文字通り九州ハ第一線ノ戦場トナリ日夜連続燈滅防空ノ為メ彩管亦心ニ任セズ加フルニ佐敷ノ飯室附近ニ八国鉄佐敷川ノ鉄橋アリ相次グ采冠凌絶ヲ極メ童画至近ノ周辺ニ於テ実ニ前後五十八発ノ大兇爆アリ遂ニ同年八月十日同鉄橋ヲ被爆此日画室十歩ノ軒ニ巨彈ヲ受ケ家屋半壊室内無数ノ弾片削烈セルモ筆者幸ヒニ其前日本図大体ノ着色ヲ了シ當時不思議ノ天佑ニ恵マレ執筆以來初メテ附近ノ防空壕ニ退避瞬時ノ差ヲ以テ萬死ニ一生ヲ得タルモ如何セン本図画面ノ一部ハ其弾片ニ貫カレ裂傷ト同時ニ屋外ヨリ激甚ナル爆風ト共ニ強烈ナル煙哨及ヒ稲田ノ泥水ヲ全面ニ浴ビ色彩ノ上ニ毛意外ノ変色退色アリ筆者傷心限りナク斯クシテ更ラニ痛恨働笑ノ終戦八月十五日ヲムカヒ一時ハ茫然自失セルモ畏キ詔勅ノ前ニ肅トシテ襟ヲ正シ泰然トシテ道心ニ立脚全力ヲ尽シテ専ラ画面ノ補色ト修正ニ邁進同年十一月二十三日新嘗祭ノ佳節ヲ以テ筆ヲ納ム 尚本画面中八方岳附近ノ裂傷ト鞍ヶ岳ニ遺ル泥ノ飛沫ハ其俛後世ハノ記録トシテ示シノコト事トセリ

初三郎 謹寓

◆ 阿蘇周辺図巻(阿蘇大観図)

◆ 佐敷附近景勝略図(水俣小景)

◆ 宇和島城の図

◆ 湯の子温泉からの絵手紙

◆ 「中文那及び北支那に於ける踏査地域略図」「三武将の色紙」「觀光路線地図」(印刷)

ちんだ すてみ
珍田 捨己 (1856～1929 安政3～昭和4) 青森県弘前市

明治・大正期の外交官。伯爵。東奥義塾の第一回留学生として米国アズベリー大学に留学後、母校東奥義塾で教授兼牧師をつとめる。明治18年外務省に入り、サンフランシスコの領事を振り出しに、各国の公使を歴任。日露戦争前後の難局に際しては、小村寿太郎外相を補佐。明治41年ドイツ大使に赴任。パリ講和会議では全権委員をつとめた。皇太子時代の昭和天皇の外遊の際の供奉長。後に侍従長となる。大正元年駐米大使としてワシントン州ポトマック河畔の桜植樹に立ち会った。今年は植樹から百年にあたる。

△展示書簡▽ 明治□年1月6日 「封書・墨書」

新正御同慶ニ奉存候 陳ハ別紙ヲ以テ御回付申上候 時事新報掲載ノ記事ハ論旨甚ダ無稽ニシテ独国ノ感情ヲ害スルノ慮モ有之 独公使ニ於テモ痛ク之ヲ心配シ此頃賢臺御主幹ノ紙上ニ於テ之ニ対スル弁駁ヲ掲載スル様 内々依囑有之候ニ付キ桂伯ニ相話候処 同伯ニ於テモ右記事ヲ看過致置候事ハ日独ノ關係ニ顧ミ甚ダ不面白事態ニ付キ独公使依囑ノ通り 賢臺ニ交渉可致旨拙生ニ命口候 就テハ甚ダ御筆勞ナガラ右可然御取計被下度 弁駁ノ方法ハニ御賢臺ニ御任申上候 又其時期ハ別紙独公使内口ノ通り駐独大使任命ヲ機トシ之ヲ掲載致候方最も機宜ナルバクト被存候 桂伯ノ命ニヨリ右不取敢得貴意候 草々敬具
一月六日 捨己

徳富賢臺

封筒表 国民新聞社 徳富猪一郎殿 為親展
封筒裏 裏霞関 珍田 捨己

むなかた しこう
棟方 志功 (1903～1975 明治36～昭和50) 青森市

昭和期の版画家。鍛冶屋に生れ、小学校卒業後青森地裁の給仕となり絵画を独学。大正13年に上京し、昭和3年帝展に初入選も、川上澄生・古川龍生の影響で版画の道に入った。昭和11年国画会に出品した『大和し美』が出世作となりその後、柳宗悦ら民芸運動の影響を受け、独特の〈板画〉を発表し注目を浴びた。ベネチア・ビエンナーレでは国際大賞を受賞。昭和45年文化勲章を受けた。

△展示書簡▽ 昭和□年 秋「封書・鉛筆書き ざくろの絵入り絵手紙」

塩崎彦市先生 棟方志功拝
昨宵山水楼老主人来車されまして、二宮大人「塩崎彦一」が体重かなり減じたかにも、このザクろを自ら樹に登って折ってくれしと、わたくしのところに土産してくださいました。あまり無理してあまり体重を減じすぎではーと思ひ居ります。おじゃましお目にかかつて存じましたが、かいつてお心つかれをかえてはチャコ「志功夫人」と話し居ります。くれぐれにもおんたい切。

◆達磨画 「鞍馬石もいゝ 貴船石もいゝ」

ひとこと解説 当記念館の創設者・塩崎彦一と親しく、二宮の塩崎邸を度々訪ね、襖絵などを描いた。かねてより達磨を描くのは難しいと言っていた志功に、塩崎が蘇峰の達磨画を一枚贈呈したところ大変喜ばれた。展示中の達磨画は志功が晩年病氣療養中に達磨を百点描くと言っていた中の一枚である。

岩手県 (後藤新平・新渡戸稻造・原敬・田中館愛橘・八重樫祈美子)

ことう しんぺい
後藤 新平 (1857～1929 安政4～昭和4) 岩手県水沢市

明治・大正期の政治家。家は高野長英の親族にあたる。福島県須賀川医学校卒。明治14年愛知県立病院院長兼愛知医学学校校長となる。明治15年自由党党首板垣退助が岐阜で刺客に襲われ負傷した際、官憲の反対を押し切って往診した。明治23年ドイツ官費留学後、内務省衛生局長として衛生行政にかかわる。明治31年台湾総督児玉源太郎に抜擢され、総督府民政局長、民政長官を歴任。島民の反乱をおさえつつ各種専売事業や鉄道事業の育成、阿片漸禁など台湾経営に手腕をふるい、其の功績により男爵、勅選貴族院議員となる。桂内閣で通相、鉄道院総裁、寺内内閣では内相、外相等を歴任し、シベリア出兵を推進。大正9年に東京市長となる。山本内閣内相兼帝都復興院総裁として、大震災後の東京復興計画を立案。日ソ親善につとめた。

〈展示軸〉

徳富仁兄大人雅囑

厭はず 身を兇戯の中に投じ 悠然自適して 蒼穹に嘯くことを舞ふに手莫く 踏むに足無きも 任他 顛倒して西し東せん干廻万転 渾て管せず 莞爾として躍起し 躬を直くする没し群童紛々として 愛憎半ばし 力を竭して压制するも 功無き所是れ造化は本玄妙なること莫からんや 平陂往復は古今同じきなり眼前の困厄 問心所に非ず理直く氣壯にして 鴻蒙を塞がんや誠し老天の能く我を識る有らば 年を経月を閲して 双攻に對せん物立つ所を得なば 自から動かさず 人知の処る所 常に窮せず君開かずや 事を作すには唯宜しく始終を全うすべしと浮雲變幻 警眼空し 仮令体滅するも 理は長久愛憎は畢竟一時の風 嗚呼 衆人一たび倒れなば再起し難く誰か是れ人間の不倒翁なる

明治戊申（四十一年）秋 新平録旧製

ひょうご解説

後藤は蘇峰を漢詩の師とし、自分の漢詩の添削を願う書簡が多数ある。明治四十一年二月七日の書簡では、朝、顔を洗って口をすすぎ「門前郵夫の到るをまつ」と書き、蘇峰の返書を心待ちにしている様子が伺える。

蘇峰の人物評

熱情と感激性と俠氣の持主・後藤

彼が胸中にはつねに一片の俠氣があった。彼がどれ程の勇氣を持っていたかということ断言が出来ぬが、少くとも所信を公言し、且つ所信を断行するに決して遲疑しなかった。例へば彼が「連この關係をつくるために、ヨッフエを日本に招き寄せ、自らその談判の衝に當つたるが如き、これがために彼の身边までも危険を覚えしめるに至つたが、彼は毫もそのために遲疑するところはなかった。これは彼が世間の空氣などには無頓着であつたためという人もあるが、彼は決して無頓着ではなかつた。寧ろ世間の毀譽褒貶を顧みず自分の所信に躍進したることは、これを勇氣と言つより外に説明の言葉はあるまい。彼は常に『人の世話にならぬよう、人の世話を焼くよう、人の世話を焼いてその報いを求めぬよう』ということをもットとしていた。これは如何にも彼らしく訓言である。彼は全くその通りに行つた。予は彼の親友としてこれを天下に向つて保証することが出来る。而も予ばかりでなく、他にも幾多の保証人があるであらうと思ふ。〔蘇翁感銘録〕徳富猪一郎著

に と べ い な せ う

新渡戸 稲造

(1862~1933 文久2~昭和8) 岩手県盛岡市

明治・大正・昭和期の教育者。明治10年札幌農学校第2期生として内村鑑三・宮部金吾らとともに、キリスト者となる。明治14年札幌農学校を卒業。明治17年東大を中退しアメリカに留学、クエーカー教徒になり、同じクエーカー教徒のアメリカ人メアリー・エルキントンと結婚する。帰国後、札幌農学校教授、東京帝大教授、東京女子大学初代学長などを歴任。明治34年後藤新平らの招聘を受け、台湾総督府の技師に任命され、台湾糖業の基礎を築くことに貢献した。明治39~大正2年第一高等学校長として学生に深い人格的影響を与えた。大正8年~昭和元年 国際連盟事務次長として活躍。著書『武士道』は有名。

〈展示書簡〉 明治29年5月15日付〔封書・墨書き〕

此書御出発前ニ相達候へハ乍御面倒はがきニて御落手の旨御報被下度候 四五日前 御芳翰を辱ふし 今般貴社徳富君並ニ貴君御渡米被遊候ニ付 往地ニ於て小生知己の者共有之候得者 一書を添候様御所望の段承知仕候 至急返書差上度存候処 小生近頃不快の為め執筆不自由ニ御座候間 乍不本意今日迄て延引致候 不悪御宥恕被下度願候 然し此便二問二あハぬ分ハ次便ニは必らず間に遇候様

左の人々に書を送り可申候間 貴君米国東岸に(桑港近場ニ御滞在有之候半)御達しに先たちて 書面相着可致と存候 故に左記の人を御訪問有之候節ハ 小生より紹介書既に相達届候積りニて 御名刺御通し被下候ハ、可然と存候

一 Prof.Dr.Ely,State University,Madison,Wiscnsonm
御承知ニも候半経済学者

一 Prof.Dr.James, University of Chicago
国家学家、財政学者としてハ米國第一流と存候

一 Senator Chace Valley Falls,Rhode Island
同氏ハ病身なれば御面会ハ六カ敷かと難存候ハ共 次に記名致候 へ
リー氏方ニ衛尋相成候ハ、後御訪問の程御決し被下度候 若し同氏ニ御面会出来候得は 政治、実業上の奇説可有之と存候

同氏の宿所失念致候得共 ポストンニつ Director 御一覽被下候得は直に解りべくと存候

— Dr.Griffs,Ithaca,N.Y.

別に紹介も不必要と存候同氏ハ拙者家内の叔父ニ有之候 同氏御訪問相成候へは 種々の人々に御紹介の勞を喜んで可致候 殊に工業・商業社会ニは知人も有之候間 御訪被下度候 拙者貴府ニハ不少友人も有之候間分なり御紹介致度存候へ共 却て E.Kinton 氏の手を経る方可然と存候 同氏ニハ今便ニて貴君の御出発の事申置候

ホルチモール府 Johns Hopkins 大学ニは定めし御地の諸氏より添書可有之と存候間別に差上不申候 欧州へ御渡たり相成候得者 独国ニ在る三四の士に一書相添中度存候間 米国御滞留間の御宿所承り置度存候 右乱筆のまゝ急ぎ投函致候 不具
五月十五日夜 新渡戸
深井様

再伸 前記 E.Kinton 家ハ Friend 即ち Quaker 宗派ニ御座候間 応接スルニ "Mr. or Mrs." ヲ称セザルこと及び其他種々異風點有之候間 左様御承知被下度候 札幌農学校 新渡戸稲造

封筒表 東京市京橋区日吉町 民友社 深井英五様
封筒裏 札幌能学校 新渡戸稲造

蘇峰の人物評（書評）「新渡戸博士の『偉人群像』」

此れは新聞でも読んだ、其の若干は英文にても読んだ、而して今また書物として繰り返した。それだけ面白き読物だ。但だ此れが果たして偉人の群像である乎、否乎は、所謂偉人の定義如何によることではあるが、或は疑問も出て来るかも知れない。然もそれは銘々の見解如何と云へば、問題はそれ迄だ。（中略）本書は単に面白ければかりでなく、往々我等を教訓するものがある。「マルクスならば一度は読んで御覧なさい。文章もなかなかいいところがある。歴史を述べるところは面白く読めます。そうして論鋒も頗る鋭いですけれども、あの人の歴史の読み方が大分間違っているように思う。逆境にあつて書いただけあつて、正義とか公平とかいう方面には、大分欠けておるよに見受ける」（中略）右はシモレル教授の談話として紹介せられたものであるが、如何にも我が意を得たる心地がする。

『田田だ』『昭和7年1月13日徳富猪一郎著』

原敬 (1856~1921 安政3~大正10) 岩手県盛岡市

明治・大正期の政治家。司法省法律学校中退。明治3年藩校作人館に入り、翌年藩士の経営する東京の英学校共懐義塾に学んだが、学費が続かず退学。フランス人経営の東京天主教会神学校に入り、洗礼をうけタビテハラと称す。郵便報知新聞、大東日報の記者をつとめ、外務省入省を契機に官界へ転進。外務次官などを歴任。明治30年官界から引退し、伊藤博文を中心とする立憲政友会に参加。政友会の実力者として西園寺公望総裁を補佐し、桂園内閣時代の立役者となる。大正3年第3代立憲政友会総裁、大正7年米騒動で寺内内閣が倒れると、政党政治家として最初の政党内閣を組閣、平民宰相として世論の支持を受けた。しかし社会運動を弾圧、普選拒否・シベリア出兵等の強硬政策を遂行し、大正10年11月4日、国鉄職員中岡良一によって東京駅で暗殺された。号・一山

〈展示書簡〉大正5年3月24日付 「封書・墨書」

拜啓 昨今愈々御清康奉賀候 陳ハ今般貴著大正政局史論御患贈仕成下御芳情奉深謝候 右書論ハ国民新聞紙上ニ於て日々面白く拝見致し論鋒及御觀察の鋭利周到なるに深く敬服罷在候次第ニ有之 確二本書ハ現代及将来ニ亘りて時務ニ志あるもの好参考書たるは申すまでも無之 小生より改めて讃辞を呈するの必要も無之と奉存じ 唯先日も拜眉の節に一言仕置候通 小生の親敷関係せしもの又ハ委敷承知致居り候ものニ就ては少數愚見を申し上げて御参者に供し度き点も有之候得共小生目下の立場よりして其事不相叶他日の機会を待つの外なきは誠ニ遺憾の至ニ御坐候 先ハ不取敢拜謝の意ヲ表し度如此ニ御坐候 草々不尽
三月廿四日 原敬

徳富猪一郎殿
封筒表 赤坂青山南町六丁目 徳富猪一郎殿 親展
封筒裏 芝公園七号 原敬

蘇峰の人物評 「原敬君」

君は南部に於ける名門の子弟であった。南部の鼻曲り鮭とて、其の強情、我慢は、本来の持前であった。併し少年時代より餓鬼大将の気分が饒くて、死に抵る迄、それで終始した。君が多くの敵があると共に、多くの味方があったのは、畢竟此れが為めだ。君は政治家的天分過多にして経世家的天分過少であった。此の一点に於ては、君の先輩陸奥君とは、大なる相違がある。陸奥君は多くの欠点があったに拘らず、尚ほ是れ経綸の才であった。君には国家の大経綸と云う如きものは、不幸にして是れなかつた。併し政治家としては近來稀有の雄材であった。

君は理想家でもなく、現実家でもあった。君には過去もなく、将来もなく、只だ現在のみであった。世界の公人中、恐らく君の如く、今日主義に徹底したものはあるまい。(中略)原君は時々刻々変化した。然も政治家として見れば、退化でなく、進化であった。凡そ政友会総裁としての原君程、其の威信の党内に徹底した者はあるまい。第一世総裁の伊藤公よりも、第二世総裁の西園寺公よりも、第三世の原君が、始めて名実両ながら総裁たるの推戴、畏愛を、其の黨員の殆ど総ての者よりかち得た。

(『第一人物随録』徳富猪一郎著)

たなかだて あいきつ

田中館 愛橋

(1856～1952 安政3～昭和27) 岩手県三戸市

明治11年東大理学部で米人教師メンテンホールらに学び、明治21年からグラスゴー大学、ベルリン大学に留学。帰国後、明治24年の濃尾大地震を機として設けられた震災予防調査会の中心人物となる。帝国大学理学教授となり、日本物理学の草創期に活躍し、その基礎を築いた。日本式ローマ字創始者。昭和19年文化勲章受賞。

〈展示書簡〉昭和18年1月1日付(封書・印刷)

『Romazi Sekai』[ローマ字世界] 昭和17年8月号抄刷

タイトル TTIKOO KINENKAI no OMYAGE!

封筒表 大森区山王町一、二八五一 徳富猪一郎様

封筒裏 小石川区雑司ヶ谷町一四四 田中館愛橋

ひつじと解説 郵送された『Romazi Sekai』(ローマ字世界)には「マリアと不動王」「一高の正門」などの見出しで田中館愛橋の日々の随想がローマ字で綴られている。

やえがし きみこ

八重樫 祈美子

(1904～1943 明治37～昭和18) 岩手県花巻市

号・東香。徳富蘇峰の秘書。花巻高等女学校、精華高等女学校を経て、青山女学院英文科卒。主婦之友社の婦人記者として活躍。その後民友社に入社し、大正15年蘇峰に認められて秘書となる。口述筆記、校正作業などを担当した。癌のため39歳で亡くなる。

〈展示書簡〉昭和18年5月17日付 (封書・巻紙)

錦簡恭受、感涙と共に拝読仕りました。賤志尊慮を煩はし恐縮に存じます。且つ又た過分の御見舞いを御患投に與りいつもいつもの御温情、拝謝の言葉もありません。病状も一進一退の有様にて困却致してをります。何も出来ず容膝の小室に焦燥の身を横ふるのみで御座います。紫山先生「川崎三郎」の帰幽には全く驚入りました。せめて生前に例の企てが完成して幾分にも晩年の寂寞をお慰め出来ましたらどんなによかったかと聯か残念にも存じます。二十四、五日には必ず御無理遊さぬ様そののみ今から御案じ致してをります。御講演なども是非短く遊さる様切に御願申し上げます。御眼疾呉々も御大事に遊さる様願上げます。待望の逗子御伴も叶はず人事不如意を長嘆致さずにはをられなくなる濡沢二十年前、老龍庵の階上冷きお茶を頂て御話を伺ひましたことをなつかしく思い出します。仰臥の執筆御判読願いたく、とりあへず御礼まで 御自愛を願上げつつ 又拝

封筒表 楽閑荘御内 徳富先生

封筒裏 八重樫 拝上

ひつじと解説 蘇峰は入院中の八重樫に毎日速達で愛情溢れる見舞状を送り続けた。1

30通に及び書簡は、『徳富蘇峰翁と病床の婦人秘書』というタイトルで、女史七回忌の昭和24年に野はら社より刊行された。本年展示の書簡は、八重樫が入院する2ヶ月前のもので、蘇峰に宛てた生前最後の書簡と思われる。封筒表には蘇峰の赤鉛筆で「東香最後の書簡」と書き込みがある。文中の紫山(川崎三郎)は、「信濃毎日」主筆で

史家でもあり、八重樫の漢学の師であった。

蘇峰の人物評 「再び東香女史に就て」

終りに臨み一言するが、若し女史が大正の末期に、予に出会わなかったとしたらば、如何なる生涯を送ったであろうか。(中略)女史は蘇翁の記室として、最も其の処を得たものであろうと信ずる。(中略)女史を世間の凡有狼より保護したるのは、予は自らそれを期したのではないが、結果としては予の力であり得ると考へる。これを以て聊か女史に酬ゆる所があったと信じ、予の良心も些さか安慰を感じている。

(徳富蘇峰著「徳富蘇峰翁と病床の婦人秘書」)

秋田県

(平福百穂・瀧田樗陰・内藤湖南)

平福百穂

(1877~1933 明治10~昭和8) 秋田県角館市

本名・貞蔵 明治・大正・昭和期の日本画家、歌人。日本画家・平福穂庵の子。明治27年上京して川端玉章に入門。東京芸術学校卒。大正5年、鍋木清方、松岡映丘らと金鈴社結成。一方で明治36年頃から伊藤左千夫と親しくなりアララギ派の歌人としても活動、歌集「寒竹」を残す。明治40年に『国民新聞』に入社。昭和4年に退社するまで、21年間にわたって籍を置いた。議会スケッチや写真版修正などを担当し、温厚な人柄と得意のスケッチにより、国民新聞社と蘇峰にとって掛け替えのない存在であった。

△展示書簡

大正9年2月16日「封書・墨書 写生歌添え」

謹拝 餘寒猶未だ難堪候処 先以先生に八日増御健勝ニ被為渡段大慶ノ至りに奉存候 将又先日八御高吟御示し給はり難有感佩仕候 疾くに拝趨御機嫌ヲ伺ひ申度存居候処 去る一日より風邪ノ気味にて十日程引筆の遂彼是取紛れ失礼仕居候 此頃の議会の紛乱も紙上にて承知聊か腕の鳴るを覚え申候が 是も不精仕居正月も無之候 乍遅引先八右御禮芳々御詫申上奉り度如斯御坐候 不順ノ候 御自愛奉祈候 頓首

二月十六日

平福百穂 再拝

徳富蘇峰先生 侍史

封筒表 相州湯河原 徳富蘇峰先生 侍史
封筒裏 東京市外上目黒五八五 平福百穂

蘇峰の人物評 「追憶一片」

大正二年二月桂内閣の瓦解によつて、予の身边にも不愉快なことが多かつた。社務を社中の元老達に託して、飄然として平福さんと旅に出掛けた。(中略)宿屋に着けば、頭を没するほど、書画帖などを積み立て、それに平福さんが絵を描かれ、その絵にまた予が賛をするということであつた。予も出まかせに其時其時に文句を即時に作つて、無遠慮に大きく、空白に書き込んだ。今から考えてみれば、まことに心無き業であつた。その時の平福さんは達者と云わんか、予が一句を書き終らざるに、既に次の幅が出来上つて、予はそれに追いまくられたる姿であつた。『山水随縁記』における挿絵は、何れも小品であるが、予の文章の如きは、この挿絵によつて全く引き立てられたもので、いわば下手の義太夫語り、上手の太榎で引き立てられたのと同様である。(『アララギ平福百穂追悼号』)

◆ 平福百穂画 「椿」 (屏風)

◆ 平福百穂画 蘇峰賛 「牛」 (軸物)

◆ 平福百穂画 蘇峰漢詩 「野山勝景」 (画帖)

瀧田樗陰

(1882~1925 明治15~大正14 秋田県秋田市)

本名・哲太郎 明治・大正期の編集者。政治家・実業家町田忠治の甥。東京帝大中退。在学中から「中央公論」の編集を手伝い、明治37年正社員となり文芸欄の拡張に努め、大正元年主幹となる。以後論壇・文壇の新人発掘と育成に力を注ぐ。「中央公論」の基礎を確立し、名をさせた。

△展示書簡

大正11年11月12日「封書・墨書」

拝復 お手紙只今拝見仕り候 新年号に御寄稿下さるべき御好意感佩の至りに存じ奉り候 十二月号の仕事は本月二十日迄に終り、廿一日より今月末までに新年号の編輯を終る都合に相成り居り候へば廿三四日頃より七八日頃までの間により可能の時日御指定下され度御本宅なり御別荘なり新聞社なり何れにてもよろしく候へば何卒時日御指定の程 祈上候 青

山会館の事気にかゝり居り毎日の新聞の金額の多寡に眼を配りながら何一つお手傳い出来ぬを御申訳なく存じ申候 頓首

徳富蘇峰先生

瀧田哲太郎拜

大正十一年十一月十二日 朝

封筒表 相州逗子桜山老龍庵 徳富蘇峰先生 侍史

封筒裏 東京市本郷区本郷三丁目六番地 中央公論社内

瀧田哲太郎

ひじょう解説

書簡中に書かれた「新年号の御寄稿」とは『中央公論』大正12年新年号に掲載された「還暦を迎ゆる一新聞記者の回顧」の記事の事で、昭和5年民友社から発行された『老記者叢話』(徳富猪一郎著)に収録されている。『老記者叢話』の序文には、「本書中「還暦を迎ゆる一新聞記者の回顧」の長編は、大正11年の冬逗子野史亭に於て、瀧田樗陰に口授したものであるが、樗陰は一字一句も聽漏らさじと筆受したものである。昭和五年二月十三日於民友社 蘇峰六十七叟」とある。蘇峰と中央公論との関係は、明治29年京都の『反省雜誌』が本社を東京に移し、『中央公論』と改名したことから始まる。蘇峰の代表的著作『蘇峰自伝』(昭和10年)『我が交遊録』(昭和13)はともに中央公論社から出版されている。

ないとう こなん

内藤 湖南

(1866~1934 慶応2~昭和9) 秋田県鹿角市

本名・虎次郎 明治・大正・昭和期の東洋史学者。秋田師範学校卒業。上京後、『日本人』『万朝報』『大阪朝日新聞』等の編集・論説で活躍。日露戦争では開戦論を展開した。一方で中国研究についても造詣が深く、明治42年京都帝国大学史学科東洋史教授。大正15年定年退官。帝国学士院会員。その研究は幅広く、日本史にも業績を残す。戦前の邪馬台国論争では白鳥庫吉と学会を二分した。

〈展示書簡〉 明治38年6月20日 「封書・墨書」

拜啓 滯京中八種々御厚情ヲ蒙り 此度の企画成功に結びつきしも御高庇一によることノ感謝ヲ不禁候 さて堀内中佐二八出発前遂に再面晤の機得かね候 何し書状にていろいろ添書その他の事依頼 老臺の御手許まで御届申上くるやうたのみ申候 ついて八同行者木里氏出発前拝訪の都合につき何卒その前堀内中佐へ一応電話にて御通し置下され候様願上候 出発八廿

四五の頃二相成可申候 猶かの地よりも時々状況可申上候 草々不一 六月廿日 虎二郎

蘇峯先生 侍史

封筒表 東京橋日吉町国民新聞社 徳富猪一郎様

封筒裏 大阪東区内海詠町二ノ三 内藤虎次郎

宮城県

(吉野作造・志賀潔・土井晩翠)

吉野 作造

(1878~1933 明治11~昭和8) 宮城県大崎市

明治・大正・昭和期の政治学者。一高在学中にキリスト教に入信。東大卒業後、清国に招かれ袁世凱の長男袁克定の家庭教師を務め、明治42年帰国。その後欧米留学し、大正3年東大教授となる。大正5年『中央公論』1月号の「憲政の本義を説いて其の有終の美を済ますの途を論ず」で、「民本主義」を主唱した。大正13年東大教授の職を辞任し、東京朝日新聞に入社したが政治評論がもとで同年退社。東大講師に復帰し、大正13年明治文化研究会を設立し「明治文化全集」全24巻を編纂・刊行した。

〈展示書簡〉 明治43年6月28日付 「ハイテルベルグの絵葉書・ペン書」

独逸の新聞の調子はドーモ日本に対して小憎らしくて堪らんといふ態度を示してゐるやうですが 個人々々は我々に対して極めて親切です 又当地の新開は支那に対して馬鹿に好意を表し(一学生がドクトルになつた事迄も仰々しくほめて書く)てゐるが個人々々は支那人を皆嫌つてゐるやうです 独逸一般の人間の頭には支那も日本もないのでしやうが 所謂識者(?)といふ連中は具體的日本人にはわだかまりは毛頭持たないが抽象的の日本と云ふ者をヒドク気にしてゐると思はれます 支那は其反対。我々共は最も普露西と近きバーテン國に居てすら非常に居心地がよろしうあります

六月二十八日

ハイテルベルグにて

吉野生

葉書表 東京市京橋区日吉町 民友社 徳富猪一郎様

葉書裏 Grub von S. Yoshino bei Frau Lavithaus str. Heidelberg

賞。仙台名誉市民にもなった。

し が きよし
志賀 潔 (1870~1957 明治3~昭和32) 宮城県仙台市

明治・大正・昭和期の細菌学者。東大卒。卒業後ただちに伝染病研究所に入り、北里柴三郎の指導により、明治31年赤痢菌を発見。一躍世界に知られる。明治34年ドイツに留学、フランクフルトの実験治療研究所で生物化学・免疫学を研究した。明治38年医学博士。大正3年、伝染病研究所の東大移管に際して、北里柴三郎らと同所を辞し、大正4年新設された北里研究所に入る。大正9年慶大教授。大正14年京城帝大の初代医学部長となり昭和4年同大学総長となる。昭和19年文化勲章受章。著書に『或る細菌学者の回想』がある。

△展示書簡△昭和15年8月25日付 「封書・墨筆」

拜啓 昨日公私共夫妻まで御寵招を蒙り御家族総動員にての御心尽しの御歓迎に預り御厚情感謝の至りに不堪厚く御礼申上候 又萩園内にて頂戴致し阿ん餅は飯島翁と共に汽車中又一ツ結構この上なく統制 忘れ得ぬ風味に有之候 湖畔に伺い「熱滅天に通し」云々の御話八帰途思ひ出しては独り胸を躍らし晴々しき気分にてさらに富士の霊姿をふりかへり眺め候

昭和十五年八月廿五日 志賀 潔 いち子

徳富蘇峰先生 御奥様

封筒表 富士山麓山中湖畔 双宜荘 徳富蘇峰先生

封筒裏 東京市赤坂区青山高樹町 志賀 潔

と い ば な ら ず

土井 晚翠 (1871~1952 明治4~昭和27) 宮城県仙台市

本名・林吉。明治・大正・昭和期の詩人・英文学者。東大英文科卒。在学中の明治29年「帝国文学」編集委員になり作品を発表。明治32年第一歌集『天地有情』を刊行し、島崎藤村と並び称される新体詩人となる。以後、評論、翻訳でも多数の著作をなした。漢文脈の雄渾な詩風「晚翠調」は校歌、寮歌の作詞に受けつがれていく。明治34年に発表された晚翠作詞・滝廉太郎作曲の「荒城の月」は有名である。この年、私費でイギリスに外遊し、ロンドンでは夏目漱石の下宿を訪ねている。その後欧州をまわり、明治37年帰国。昭和9年まで二校教授を勤め、後進の指導にあたる。訳書では「イーリアス」「オデッセア」など。昭和22年芸術院会員となり、昭和25年文化勲章受

△展示書簡△昭和 年8月17日付 「封書・墨書」

謹啓 八月十六日の中外日報により神経痛に御難儀の旨を拝承切に尹御同情申し上げます。たまたま今日来訪の客が神経痛に悩みテ百万治療を試みても不可、最後に左の方法にて全癒したりと申しました。味噌(普通)を痛い処へぬり 其の上を紙で蓋ふといふ至極簡便な方法であります。御試みなされては如何 今朝〇来客あり、昨朝十六日の中外日報着、何やら因縁らしくも感ぜられます。とり急ぎ御一筆申上ます。 敬具

八月十七日 軽井沢町星野温泉地四十 土井 晚翠

徳富蘇峰先生 侍史

封筒表 山梨県山中湖畔 双宜荘 徳富蘇峰様

封筒裏 長野県軽井沢町星野温泉地四〇 土井 晚翠

蘇峰の人物評(書評)「土井晚翠学士の随筆」

(中略)夏目漱石に関する一件は寧ろ著者に取って当惑の事情を、其の未亡人に向って弁明したるものにして、我等も著者が偶然の事から、つまらぬ濡衣を着せられたことを同情するに遲疑しない。而して著者の弁明を無条件に受け取らんとする者である。(中略)終尾の「子の喪を悲しむ」に至りては、卒讀に禁へない。そは申す迄もなく、記者も亦た此の深刻なる経験の苦杯を満喫したる一人であるからだ。附録の令夫人「照子の思ひ出」は尚更らである。

(『日口だより』昭和9年12月15日 徳富猪一郎著)

ひとこと解説 夏目漱石に関する一件とは、留学中の漱石の神経衰弱状態を土井晚翠が

外務省に連絡したため日本で騒ぎになったといわれていることであるが、晚翠はこの件に関する弁明を「漱石さんのロンドンにおけるエピソード 夏目夫人にまいらす」というタイトルで随筆集に収録している。

山形県

(伊藤忠太・安達峰一郎・斎藤茂吉)

伊東 忠太 (いとう ちゅうた) (1867~1954 慶応3~昭和29) 山形県米沢市

建築家・美術史家。明治26年大学院在学中に「法隆寺建築論」と題し、初めての法隆寺の建築学的な研究を発表し、法隆寺研究の道を開いた。明治34年工学博士となり翌明治35年中国・ビルマ・インド・エジプト・トルコ・欧米を歴遊し、明治38年帰国。大正13年には沖繩の建造物の調査を政府に具申し、数多くの文化財が国宝に指定された。昭和3年、東大を退官したのち、早大教授となり建築史を講義。主な設計は明治神宮神殿、築地本願寺などがある。古社寺保存会員・国宝保存会員・学士員会員・芸術院会員として、永く建築界の重鎮であった。蘇峰と同じ昭和18年に文化勲章受章。

△展示書簡 昭和7年2月27日(消印)

蘇峰の古稀祝賀会の出欠の返信葉書。

*出席・欠席のどちらにも印がない。

ひごとと解説 古稀祝賀会の出席者名簿には、伊東の名があり、出席していたことが分かる。

安達 峰一郎 (あだち みねいちろう) (1869~1934 明治2~昭和9) 山形県山辺町

治から昭和に掛けて活躍した日本の外交官。国際法学者。東大卒。ジュネーブでの「国際紛争平和的処理議定書」で日本の立場を説明する峰一郎の様子をみて、新渡戸稲造は「安達の舌は国宝だ」とそのフランス語の説得力を絶賛した。国際連盟日本代表。正義と公平にもとづく見識は、各国から厚い信頼と尊敬を得た。昭和5常設国際司法裁判所所長。任地オランダで客死。その業績により、昭和9年オランダ国国籍・常設国際司法裁判所所葬として葬儀が営まれた。

△展示書簡 昭和6年6月30日付(封書・ペン書き オランダ・ハーグより)

拜啓 去五月廿七日朝刊、日日紙上ニテ貴見ヲ拝シ感悦ニ不堪 一書啓上

仕度ク、アセリ居候内ニ、六月六日付御懇書ニ接シ、御全快ノ御事ヲ確知シ欣喜ノ至リ。此上トモ切ニ御自愛、永ク健全ニ入ラセラル様、向天切コ祈上候 小生モ年初、国際法院ニ長タルヲ諾シ候以来、コレマデ感シタル事ナキ重責ヲ感シ、且ツ今春以来、意外ニモ国際紛争重要事件多数持込マシ、年末マデー日ノ休ナク開廷審理ヲ要シ(皆欧州ニ関スルモノナルハ至幸ニ候)、多忙ニ閉口致居候ヘドモ、幸ニ至健。何卒御安心被下度願上候。唯今ハ独塊(ドイツ・オーストリア)関税合併問題公判準備中ニテ、ケログ、王寵恵、フスタマンテ等モ、遠国ヨリ着牙(ハーグ)に到着。三百以上ノ記者モ来着。騒然、混雑致居候。当国ノ如キモ、世界不景氣ノ影響ヲ受ケタレドモ、諸社会少シモ乱レズ。微小ナガラ感嘆ノ目的相成居候。何し不遠、諸国回復ニ向フ事ト認メラシ候。支那ノ方ハ将来、可ナリ永ク混乱ヲ呈セラルベク、其後ハ多分、一種特別ノ連邦為ルモノナラント存候。之ニ依リテ国策ヲ樹立セバ、我常ニ究セザルベシト、遠処ヨリ観測セラシ候。取込中御清康ヲ祈リ、且ツ明治卅八年五月ノ昔ヲ追想シ、深く敬仰ノ誠意ヲ表上申候。

六、州、海牙 安達謹拝

蘇峰先生侍史

封筒表 東京新井宿二八三二 徳富猪一郎様

封筒裏 M.Adachの印で封印

◆昭和6年11月6日(消印)でオランダの新聞「DE TELEGRAAF」の「JAPAN=CHINA」と題した政治漫画が蘇峰に送られてきた。

ひごとと解説 新聞切り抜きにはオランダ語と英語で書かれたコメントが入り「国際司法裁判所所長・安達峰一郎閣下に捧げる」「日本の平和の精神が軍国主義者たちに勝利することを祈る」とある。

斎藤 茂吉 (さいとう もきち) (1869~1935 明治15~昭和28) 山形県上山市

歌人・医学博士。斎藤紀一の養子。東大医学部卒。明治39年伊藤左千夫の門下となり『馬酔木』『アララギ』に短歌や評論を発表、左千夫没後は島木赤彦らとアララギ派の中心的歌人となる。大正10年文部省在外研究員としてドイツ、オーストリアに派遣され、4年間精神病学の研究に専念。大

正14年帰国。翌年養父の後を受け、青山脳病院院長となる。赤彦没後は『アララギ』を背負って活躍。

〈展示書簡〉昭和25年6月2日付（封書・墨書）

謹啓 今日には計らずも御手紙いたゞきまして感涙にむせびました 先生御丈夫にわたらせ玉ふこと何といふ幸福でございますませう 昨年の夏は川田君とお会しまして先生の御事を語りあいました が参上もかなはず一年過ぎてしまいました 本年はじめより元氣失ひ寝たり起きたりでございます 今日計らずも御手紙二接しまして涙せきあへず自分ながらあやしんで居ります 小生如き年齢にては先生から御らんになればお孫ぐらゐな年齢でございますが身の衰へが手きびしく巡つてまゐります アララギ御らんたまはりまして無上の忝さでございます 小生もアララギで辛うじて餘喘を保つ懇でございます 平福一郎君は帝大医科で病理学の助教になつて居られます 御手紙に平福画伯に及ばれました事は何とも忝ひことでございます どうぞ先生には百歳以上願上ます 小生の伯母は九十九歳まで長生いたしたのでございます 熊本の竹下兄もすでに泉下 田尻兄はどうなさいましたか 小生山形県に疎開後は全く消息を絶ちました 西洋流でございますけれども小生只今六十九歳になりました 先生の神経御病御軽減のこと何とも御めでたく御よろこび申上げます 頓首

六月二日 斎藤 茂吉拝
徳富猪一郎先生 玉案下

封筒表 熱海市伊豆山押出 徳富猪一郎先生
封筒裏 東京世田谷区代田一ノ四〇〇 斎藤茂吉 九拝

蘇峰の人物評（書評） 「金槐集私鈔」

医学博士斎藤茂吉君の『金槐集私鈔』は、其の丁数、四六判四百頁に過ぎざるも、力作と云ふも、過甚であるまい。實に熟読する価値がある、精読する価値がある。今更ら鎌倉右大臣の和歌を、我等が礼讃したとて、別に香ばしきことはない。されど如何に自制せんとしても、彼の和歌を礼讃したくなる。彼の和歌には、確かに生命がある。気魄がある。青春の血液が流れ、且つ溢れている。何んと必らずしも巧と、拙とを問はんやだ。

斎藤君は和歌を解説するばかりでなく、亦た作者と時代とを解説してゐる。巻中の『源実朝雑記』はそれである。又た私鈔補遺の第一から第三までは、概して金槐集に対する考証と批評だ。即ち金槐集に対する古人、今人の諸説をも引用し、それを批評し、それを審定してゐる。されば此の一冊を読めば、殆ど金槐集に対する諸説を集めて、大成したるものに庶幾い。而して著者の取捨選別は、概して公平にして允當を得ている。（後略）『日田だより』大正15年8月3日 徳富猪一郎著

福島県

（山川健次郎・朝河貫一・星一）

山川 健次郎 やまかわ けんじろう

（1854〜1931 安政元年〜昭和6）福島県会津

会津藩士山川尚江の三男。9歳から藩校日新館に学び、15歳のとき、藩の軍制改革により白虎隊に編入されるが、若年のため一旦除隊、しかし城下に戦火が及ぶと籠城戦に加わった。開城後、新潟へ逃れた後、東京へ出て苦学した。18歳で政府のアメリカ留学生に選ばれ、エール大学で物理学を学び22歳で学位を取得。帰国後、東京開成学校で教鞭を取った。東京大学に改組されると、26歳で最初の物理学教授となり、48歳で総長となった。戸水事件では自ら辞任することで混乱を治めた。その後九州、東京、京都の各帝大の総長を務め、大学教育の発展に努力した。兄・山川浩は幕末の武士、明治時代の陸軍軍人、政治家。姉・山川二葉は、明治時代初期の教育者。妹・大山捨松は日本初の女子留学生で大山巖夫人である。

〈展示書簡〉大正12年12月口日付（封書・墨書）

向寒の候二御坐候処 益々御清栄二御坐候半 奉賀候 扱『正書公政教要録』と申す書別封にて貴御覽二呈し候、老台修史の御参考として差上呉れ候様見称山義口の人々の市望につき如此に御坐候 敬具

大正十二年十二月廿四日 健次郎
徳富殿

封筒表 東京府下大森町源蔵原 徳富猪一郎殿
封筒裏 東京府西巢鴨町 池袋 山川健次郎

朝河 貫一 (1873~1948 明治6~昭和23) 福島県二本松市

歴史家。東京専門学校卒。アメリカに渡り、エール大学大学院で学ぶ。明治39年からエール大学で教鞭をとり、36年間にわたり日本史とヨーロッパ中世制度史を論じ、エール大学名誉教授となる。昭和15年には天皇に日米戦回避の上奏をした。

△展示書簡▽昭和()年5月21日付(封書・墨書)

拝啓一月七日の貴墨及び秘府略穀部の校製本拝受、万々鳴謝仕候。誠ニ此の珍重なるのみならず、米、アワ、英、そのほかの時宜に付きうるじよらすく、かねて又「米」はよののみならず、「田」ハ米田又ハ水田ならざることをも確かめ候。かゝる貴重の絶版本を御周旋被下謝詞を知らず候。只々稲の部の欠けたるを憾み候のみ。御消息は東京日々にて毎日拝承仕候。恰も讜咳二接するか如く感じ候。又先度御惠贈の御近著二つきては大体同意ニ候。只々米国心理の御見解の簡明に過ぎたるをのみ賛し難く候。米国に関する政治的の御説には異存なく候。猶読了の後、御垂示を乞ふべく候。謹言

昭和五年二月十日 朝河 貫一

徳富蘇峯大人

封筒表 東京市京橋区日吉町二十 民友社 徳富猪一郎殿

ニューハブンのエール大学より。

ひとこと解説 朝河貫一の渡航費用は大西祝、徳富蘇峯、大隈重信、勝海舟などが援助した。蘇峯は留学中の朝河に『国民新聞』への寄稿を求め、朝河は「形影生」という名で原稿を書いている。

星 一 (1873~1951 明治6~昭和26) 福島県いわき市

大正・昭和期の実業家・政治家。明治27年渡米して、コロンビア大学を卒業し帰国。星製薬を創立して製薬業を手がける。星薬科大学の創設者。後藤新平の政治資金の提供者だったこともあって、阿片令違反で逮捕され結局無罪となったが大きな痛手を蒙った。明治41年衆院議員に当選。政党内所属せず独自の活動を行った。作家・星新一は長男。

△展示書簡▽昭和10年5月9日付(葉書・ペン書)

謹啓 五月八日附の書留の御手紙拝受、当日大声にて読上げます。頭山杉山両氏に先生の処に御願に参ったことを話しましたら大に喜ばれました。全く天災と存じ両人に無事を伝えます。拝具
昭和十年五月九日

葉書表 京橋区銀座西八丁目民友社 徳富猪一郎様 侍史

星一

ひとこと解説 蘇峯からの書留に対するお礼の葉書。書中に玄洋社の杉山茂丸(星の師)と頭山満の名があることから、この年(昭和10年)星一により企画実施された両氏の交友50年を記念した「金菊の会」に際し、祝文の類を蘇峯に依頼し、それを受け取った礼状と思われる。「当日大声にて読み上げます」とある。絵葉書は星製薬工場の航空写真。(現在の五反田TOCC)

参考文献

- ・『蘇峯とその時代』高野静子著 中央公論社 昭和63年
- ・『続・蘇峯とその時代』高野静子著 徳富蘇峯記念館 平成14年
- ・『コンサイヌ日本人名事典(第4版)』(株)三省堂 平成13年
- ・『大人名事典』平凡社 昭和28年
- ・『第一人物随録』徳富猪一郎著 民友社 大正15年
- ・『蘇翁感銘録』徳富猪一郎著 宝雲舎 昭和19年
- ・『徳富蘇峯と病床の婦人秘書』野ばら社 昭和24年
- ・『評伝平福百穂』加藤昭作 短歌新聞社 平成14年